

オマー・カイヤム (?—1123 A. D.)

(本誌前號の口繪に因みて)

全歐文化の所謂「暗黒時代」——凡ての學術技藝はマホメト文化の繼承者であるトルコ民族にうけつげられてゐた第十一二世紀の頃、西アジアのペルシヤ國セルジユク王朝に Omar Khayyam オマー・カイヤムと呼ぶ學聖があつた。生地と死所と共に東部ペルシヤの Nishapur とだけしか知れてゐない。父は天幕作りを業としたと傳へられてゐるが、其の子である吾等のオマーは生來數學の才に秀で、アラビヤ語で有名な代數の書物を著したので、一躍其の名が遠近に聞え、西曆 1074 年遂に大サルタン Malik-Shah の朝廷に召されて、非常に大規模の天體觀測をなし、次いで又、曆法の根本的改革をなし、こゝに所謂 Jalali 紀元を 1079 年三月 15 日から實行することになつた。此の曆法は純然たる太陽曆であつて、33 年間に 8 回の閏日を置くのであるから、之れは眞の太陽の運行に比べて、毎年 19.6(秒)だけ長過ぎることとなり、結局 4000 年間に 1 日の差違を生ずるに止まる。故に、現今全世界が用ゐてゐるグレゴリ曆(毎年 26 秒長過ぎ、3300 年に 1 日の差あり)よりも優秀である。

オマーの今一つの大著はルバイヤト Rubaiyat と呼ぶ詩集である。之は 500 章より成る四行詩で、酒の讚美にことよせて人生を諷し嘲つたものであるが、英國の Edward FitzGerald が 1859 年に其の一部に翻譯し出版したので、俄かに世に知られるに至つた。我が日本にも茅野脱牛氏の譯が出てゐる。

この驚くべき詩人兼哲學者である オマー・カイヤムの墳墓が最近ニシャブールに於いて、ペルシヤ古蹟保存協會の手により清められ、スツカリ外觀を改めた。この墳墓の寫眞を本誌第 162 號の口繪に紹介したのである。

花山天文臺へ京都の蹴上げから登る「花山道路」の標識の一つに「オマー谷」といふのがあつたのは、此のオマーを記念するものである。

訂正 天界十月號第 469 頁、京都天文學會正會員中第 11 番目の渡邊敏夫氏の現職が京大副手とあるは誤りで、京都帝大講師ですから謹んで訂正致します。同第 469 頁下段、括弧中に今 1934 年の天界珍象とあるは今 1935 年の天界珍象に就き訂正致します。下の字を切抜いて糊附けて下さい。

今 1935 年の天界珍象